

日本動物福祉協会一等賞 小学生の部

「スコティッシュフォールドの耳」

倉敷市立児島小学校 四年

山根 はるひ (やまね はるひ)

わたしはナナという名前のスコティッシュフォールドを飼っています。飼えなくなった人から引き取りました。テレビやペットショップで見て、スコティッシュってたれた耳でまん丸の目でかわいいなと思っていたので、うれしかったです。ナナを飼うことになってスコティッシュについて、家族みんなで調べました。

そこで、たれ耳なのは骨軟骨異形成症こつなんこついけいせいしょうという病気だと知りました。寿命がふつうの猫より少し短いことも知りました。そして、たれ耳にするためにたれ耳同士で交配をして、たれ耳のスコティッシュを生まれやすくすることも知りました。この交配は禁止されているそうなのですが、たれ耳のスコティッシュのほうが人気で高く売れるからという理由で完全にはなくなっていないそうです。それを知ってわたしはショックでした。人が、病気になる可能性が高くなる猫を作っているなんて。

ナナはうちに来た次の日にお腹に赤ちゃんがいることがわかりました。前の飼い主さんは、ナナはまだ子猫だから大丈夫と思って、たれ耳スコティッシュのオスといっしょに飼っていたそうです。わざとそうしたわけではないけど、禁止されている危険な交配になってしまいました。ナナは一匹流産しました。その後四匹の赤ちゃんを産み、一匹は亡くなっていました。三匹の子猫にミッツ、ルッツ、ナッツと名前をつけました。ふつうの子猫は百グラムくらいで生まれてくるのですが、ミッツは五十グラム、他の二匹も七十グラムほどしかありませんでした。子猫たちは、自分でおっぱいを探して飲むこともできませんでした。三時間ごとに哺乳びんでミルクをあげて、体重を計りました。増えていると安心し減ってしまうととても心配しました。二日ほどたって、ルッツとナッツはナナのおっぱいが飲めるようになりました。でも、一番小さなミッツだけはなかなか上手にならず、哺乳びんであげる日が続きました。それでも哺乳びんを口に近づけると、すぐに吸いついてきて、いつも一生けん命ミルクを飲んでいました。十日目の朝、ミッツの様子がおかしくなりました。ミルクを全然飲まなくなり、苦しそうに息をするようになりました。急いで病院に連れて行きました。病院では、小さく生まれた子を生かしておくことは難しいと言われました。できることはありませんでした。

その日、ミッツはナナのお腹で兄弟たちに囲まれて、天国へ行きました。「死んじゃった」とお母さんが言いました。息をしていないミッツをお母さんとしばらく見ていました。また息をするんじゃないかと思ったからです。だけどミッツはもう息をすることはありませんでした。雨の中、家族みんなで庭にうめました。ミッツが眠る土の上にお母さんとセダムを植えました。セダムを見るたびにミッツを思い出せるように。

ルッツとナッツは熱を出したり、お腹の調子が悪くなったり、いつもどちらかが病院にかかっていました。その度に死んでしまわないか心配しました。そんな状態が半年ぐらい続き、それからだんだんと病院にかかることもへり、今では元気いっぱいです。

わたしはたれ耳同士の交配の悲しさを経験しました。子猫たちが痛くて苦しくてつらい思いをしているのを見ました。生きたくても生きられなかった姿も見ました。こんなひどいことはもう起らないでほしい。何も知らなかった時、立ち耳よりたれ耳がかわいいなと思っていました。今は耳の形なんてどっちでもいいから長生きしてほしいと思います。人がかわいいからとか、高く売れるからといって作り出されたスコティッシュフォールドという猫の悲しさを知ってほしい。ミッツのように生きたくても生きられなかった猫たちのために。